



25

「学び合い」の心を大切にしている学校

前谷地小学校

今回は、前谷地小学校を紹介します。

前谷地小学校は、市の北西部（旧河南町）に位置し、周囲を水田に囲まれた自然の豊かな学校です。開校は明治6（1873）年。現在まで18,800人の卒業生が巣立った歴史ある学校です。

平成16年には、待望の新校舎が完成し、木材を多用した木の香りあふれる校舎で、全校児童99人が「学び合い」をテーマに毎日学習に取り組んでいます。

特色ある取り組みとして、第一番目に「交通少年団」の活動があります。1年生から6年生までが地区ごとに縦割り班を編成し、高学年が低学年をやさしくリードしながら、毎朝集団登校を行っています。地域のボランティアである「安全見守り隊」の方々も、児童の登下校を



いつもやさしく見守ってくれています。



一番目に、学区に広がる水田や畑を活用した農業体験学習が挙げられます。今年の5年生は河南地区の「田んぼの楽校」として、農業改良普及センターや学校支援ボランティアの方の協力をいただきながら、米作りについて学習しています。今年はおこめぼれと古代米を植え、秋の収穫が今から楽しみです。また、4年生は「大豆博士になる」をテーマに、大豆や枝豆の栽培に挑戦中です。

三番目に、前谷地に伝わる郷土芸能「かさまつ太鼓」の伝承があります。高学年児童38人が心を一つに、太鼓の練習に取り組んでいます。地域の守り神である「龍ノ口神社」の春・秋の例祭で演奏したり、市内で開かれる各種のイベントに参加したりして、演奏活動を展開しています。このように豊かな自然と、あたたかい地域の方とのつながりの中で、子どもたちは、毎日元気に楽しい学校生活を送っています。

にぎやか家族 33

雄勝町大須



左から、瞳ちゃん、あゆみちゃん、夏美ちゃん

小松 夏美ちゃん（10歳） 将来の夢 お医者さん
 瞳ちゃん（8歳） ケーキ屋さん
 あゆみちゃん（6歳） 洋服屋さん

〈両親から〉

明るく素直でやさしい子に育て下さい。

今月の表紙から

お茶には、さまざまな種類がありますが、どれも健康の維持には効果があり、昔からお茶の持つ薬効を期待して、症状にあわせて飲まれてきました。お茶の中でも、日本人にとって最も身近なお茶が緑茶です。緑茶に含まれるカテキンは、緑茶特有の渋みのもととなっている成分で、血中脂質であるコレステロールや中性脂肪を減少させる作用があります。

今回は、桃生町檜崎地区の佐々木浩さんの茶畑で、一番茶の摘み取り作業を取材しました。佐々木さんでは、自宅裏の鹿島山で、1.5ヘクタールの茶畑に「ヤブキタ」などの品種を栽培しています。今年は5月22日から摘み取りが始まり、摘み取られた茶葉は、農協の製茶工場へ加工し、販売されます。

桃生茶は、伊達藩が政宗公によって開かれた時代に、秀吉の時代に没した千利休の影響で、茶人としても精通していた政宗公が、ある大名に送った

た書状に、「仙台を北の小京都にしたい」という旨の文が書かれ、桃生の茶畑は、当時の産業振興の一環として進められました。また、この地は日当たりが良く、北上川に立ち込める霧が、茶の生育に適していることから「北の茶」として知られてきました。

佐々木さんは「今年は連休直後の低温で新芽の生育を心配しましたが、作柄、品質は例年並みになるようです。桃生茶は渋みが少なく、スッキリとした味わいなので、飲みやすいと思います。多くの皆さんに飲んでもらいたい」と話していました。



佐々木 浩さん
 （桃生町檜崎）



サークル仲間

なかま 33

ちぎり絵のすばらしさを伝えて

桃生ちぎり絵サークル

今回は、桃生ちぎり絵サークルの皆さんを紹介しします。

「桃生ちぎり絵サークル」は、平成3年7月に旧桃生町公民館主催で開催された和紙ちぎり絵教室がきっかけとなり、同年9月に教室に通っていた有志15人で設立しました。

現在、メンバーは14人で、40代から70代と幅広い年齢層の方が参加しています。

主な活動は、月に1度集まり（8月と1月は休み）、自宅で作り上げた作品をメンバー同士で評価しあったり、新たな



作品に取り組み、技法を学んだりしています。

和紙ちぎり絵は、染色した和紙をちぎって毛羽を出して貼り、風景や花・人物・動物などを表現して「絵」にするものです。和紙の切り口にでる毛羽がふんわりとした雰囲気を出していて、ぬくもりやさしさが感じられます。

これまで作成した作品は、毎年開催されている桃生地区文化祭や宮城県民文化祭、ちぎり絵全国展など、各イベントへ出展していて、ちぎり絵全国展では、これまで4人が入選しています。

メンバーの皆さんは、「今後も、ちぎり絵を通して多くの方と知り合い、ちぎり絵のすばらしさを伝えていきたい」と話していました。

スポットライト②

世界チャンピオンは子どもたちが大好き！

今回は、桃生町倉坪地区にお住まいの白石智章さんを紹介しします。

白石さんは、5月にフランスのトゥールーズで開催された、第13回世界ろう武道選手権大会空手競技に日本代表選手として出場しました。この大会は3、4年に一度開催される聴覚障害者のための国際競技で、今回は、世界20カ国以上から、200人以上の選手が参加しました。

白石さんが出場したのは、男子形の部と組手の部で、形の部では初参加ながら見事に優勝、組手の部（80キロ以下級）でも第3位になるなど輝かしい成績を収めました。

今年で27歳になる白石さんは、両親と弟、祖父母の6人家族です。生まれつき聴覚にハンデを背負うことになってしまいましたが、6歳のころ両親の勧めで始めた空手が人生の転機となり、数多くの全国規模の大会で活躍されました。



製造会社に勤務する傍ら、週に3回地域の子もたちにも空手も指導しており、少しでも多くの人に空手の良さを知ってもらおうと奮闘してい



ます。子どもたちが「稽古の時は厳しいけど、一緒にいると面白くて楽しい」と話すように、子どもたちみんなから慕われ頼りにされています。

来年のデフリンピックは、競技種目に空手が新たに加わり、より一層注目される大会になりますが、「開催日が、子どもたちの大会と重なっているので、出場は考えていません」と、とても世界大会で優勝した選手とは思えない言葉を穏やかな表情で話していました。選手として一流の白石さんですが、指導者としても責任感が強く一流です。空手の魅力について聞くと、「礼儀作法の大切さ、物事に対する集中力や精神力を養えるところですね」と話していました。

今後は、選手としてより指導者として人材の育成に力を注いで行きたいと笑顔で話す白石さん。世界チャンピオンは、無限の可能性を秘めた子どもたちの成長を見守るのが大好きなんですね。

※デフリンピック：4年に1度、世界規模で行われる聴覚障害者のための国際競技大会です。